

# 第3編 学校の危機管理

## 第1部 自然災害（震災編）

### 第3章 事後対応（教育活動の再開に向けて）

- 第1 安否情報、被害状況の収集と把握
- 第2 学校教育施設の再建
- 第3 授業再開の準備
- 第4 応急教育計画の作成
- 第5 心のケアの充実
- 第6 転出入に伴う学籍変更等
- 第7 入学（就学）相談に関する対応
- 第8 授業料の免除等



## 第1部 自然災害（震災編）

## 第3章 事後対応（教育活動の再開に向けて）

教職員は、校長の指揮監督の下、教育活動の早期再開に向けて、児童・生徒等の被災状況や避難先を把握するとともに、教室の確保や通学路の安全確認等をおこなう。あわせて、児童・生徒等の心のケアにも十分配慮する。

## 第1 安否情報、被害状況の収集と把握

## 1 教職員による児童・生徒等の安否確認等

緊急連絡用（引渡し）カード等の連絡先に家庭訪問又は電話で、児童・生徒等、保護者の安否状況を把握する。

また、携帯・固定電話、インターネット、電子メール、ホームページ、災害伝言ダイヤル、SNS、保護者コミュニケーションシステム、統合型学習支援サービスなど多様な手段を適時活用して、保護者に学校の状況を伝えるとともに、保護者から学校への安否情報提供を依頼する。

さらに、本人や友人、近隣者等の安否を記入できるノートを学校に備え、記入させる方法や区市町村掲示板に学校と連絡をとるよう掲示するなどして、安否情報の収集に努める。

校長は、児童・生徒等の被災状況を把握し、所管の学校経営支援センターに報告する。

大規模な地震が起こった後は、しばらく通信機器の被災や回線の混雑により、学校と保護者が電話で連絡を取り合うことが難しい状況になることが考えられる。電話回線に比べて、インターネットは比較的災害に強いと言われており、電子メールやホームページなど電話以外の通信手段、情報発信手段を準備することで、災害時の情報収集・発信能力を高めることができる。

なお、児童・生徒等の安否確認については、東京都総務局総合防災部が作成している「災害時の児童生徒の安否確認ハンドブック」を参考にする。

## 2 全国避難者情報システムからの情報収集

東日本大震災等では、多くの住民が全国各地へ避難し、避難先の把握が課題となった。これを踏まえ、総務省では「全国避難者情報システム」を構築し、避難先市町村から提供された情報を、避難元市町村が各種給付や減免措置等の連絡に活用できる仕組みを整備している。

学校は、震災時に備え、あらかじめ災害時の「全国避難者情報システム」について周知しておく。

## 3 教科書、文房具等の被害状況の把握

児童・生徒等の安否確認とあわせて、教科書や文房具等の紛失・焼失の状況を把握し、所管の学校経営支援センターに報告する。

## 第2 学校教育施設の再建

校舎について、補修や改修が必要な箇所を点検する。

被害の程度が大きい場合は、学校経営支援センターに対し、危険度判定を要請する。

一方、部分的な補修で対応可能な場合は、「都立学校施設維持管理業務に関する通知」に基づき、修繕業務受託事業者（TEPRO）に修繕を要請する。

### 第3 授業再開の準備

#### 1 学校教育の再開に向けた被害状況調査

校長は、被害状況把握担当の教職員に指示し、学校教育の再開に向けて、下記の被害状況を調査し取りまとめるとともに、必要な措置を講じる。

<b>児童・生徒等・ 教職員の被害</b>	発災直後に実施した安否確認で得られた情報を基に（必要に応じて追加的な調査を行い）以下の内容を取りまとめる。 ○児童・生徒等及びその家族の安否、住居等の被害状況 ○教職員及びその家族の安否、住居等の被害状況
<b>校舎等の施設、 設備の被害</b>	校舎等の施設・設備の被害状況を把握し、必要な応急措置等を講じる。 ○学校施設・設備の安全確認、転倒物等の片付け・整理 ※後日の報告等に備え、被害状況等は写真撮影し、校内平面図に位置を明記して記録する。 ○危険物・危険薬品（理科室、灯油保管場所等）の安全確認と必要な措置 ○学校給食施設・備品の点検と必要な措置 ○ライフライン（上下水道、電力、電話等）の使用可否確認 ※使用不可の場合は、元栓閉、ブレーカー遮断等を実施 ○危険箇所・使用禁止箇所について、立入禁止区域等を設定及び表示 ○区市町村教育委員会に対し、以下を要請 ・専門家による点検（地震の場合は「応急危険度判定」） ・被害箇所の応急処置・復旧 ・ライフライン事業者による点検・復旧 : :
<b>通学路・ 通学手段の被害</b>	通学の安全確保のため、以下の情報を収集し、通常に通学手段による通学の可否について検討する。 ・学校周辺及び通学路の被害状況、危険箇所 ・スクールバスの運行可能性 ※区市町村教育委員会を通じ、委託事業者を確認。ただし、特別支援学校は区市町村教育委員会を通さず、直接委託事業者を確認する。 : :

#### 2 被災児童・生徒等への支援

##### ①教科書・学用品等の確保

校長は、児童・生徒等の学習に支障が生じないように、以下のとおり教科書・学用品等の確保に努める。

- ・児童・生徒等の安否確認及び被害状況確認を通じて把握した教科書・学用品等の損失状況を取りまとめ、速やかに区市町村教育委員会へ報告する。  
   ※災害救助法が適用された場合は、学用品の給与が実施される。
- ・当面必要な教材・学用品等については、学校に備えている教材等を有効利用して対応する。
- ・教科書等を所持していない児童・生徒等に配慮し、必要に応じてワークシート等を活用する。

##### ②就学の機会確保

校長は、学級担任に指示し、事故・災害等により被災し、就学援助が必要な児童・生徒等の把握に努める。あわせて、その情報を取りまとめ、区市町村教育委員会に報告する。

### ③避難・移動した児童・生徒等、転出する児童・生徒等への対応

校長は、学級担任に指示して、事故・災害等により避難・移動した児童・生徒等及び転出する児童・生徒等について、以下のとおり対応する。

- ・避難・移動した児童・生徒等について、電話等による連絡や移動先への訪問などを行い、在籍校への復帰時期等の実状を把握する。
- ・転出した児童・生徒等については、転出先の学校と情報交換を行い、心のケア等に十分配慮する。

### 3 児童・生徒等の通学路の安全確認等

授業再開に当たっては、児童・生徒等が安全に通学できるよう、通学路の安全確認を行う。安全確認は、通学区域地区担当の教職員が行う。

スクールバスの運行経路を変更する必要がある場合は、関係する特別支援学校長が、スクールバス契約で指定された運送管理者の職務として、緊急的な運行経路（以下「緊急ルート」という。）を設定する。

契約相手方である会社側の添乗員は、契約上、不測の事態が発生したときは臨機に適切な措置を講じる責務を有しており、携帯電話等を携行し、緊急時には運送管理者の指示に従って迅速かつ適切に対応することとされている。このため、関係する特別支援学校長は、添乗員と直接連絡を取り、緊急ルートを決定し、保護者に周知する。

なお、契約者である学校経営支援センターに対しては、契約変更手続等の関係上、緊急ルート決定時には速やかに内容を連絡する。やむを得ず事前連絡ができない場合は、事後に連絡する。

### 4 授業再開時期の決定

都立学校は、学校経営支援センターと協議の上、授業再開時期の目途を定める。

必要に応じて、都立学校教育部高等学校教育課（指導部高等学校教育指導課、指導部義務教育指導課と連携）、特別支援教育課（指導部特別支援教育指導課と連携）に相談する。

これらを踏まえ、校長は、学校の実情に応じて再開時期を決定する。協議に当たっては、学校施設の応急復旧の状況、被災校舎の立入禁止等の安全対策、通学路の安全確保の状況、上水道の復旧状況、使用可能な教室数、登校可能な児童・生徒等の人数、避難住民の意向等を考慮する。

### 5 授業再開の保護者への周知

授業再開に当たっては、学校は授業再開の時期について、電話連絡網、掲示、案内などを通じて保護者に周知する。

## 第4 応急教育計画の作成

校長は、第3の「1 学校教育の再開に向けた被害状況調査」の結果を踏まえ、区市町村教育委員会と協議・連携し、以下の①～④について検討の上、地域や学校の実態に即した応急教育計画を作成する。

計画の作成に当たっては、学校経営支援センター、養護教諭、スクールカウンセラー、学校医等と連携し、児童・生徒等の心身の状態に配慮するとともに、速やかに保護者及び児童・生徒等へ周知する。

応急教育計画に基づく教育活動の再開に際しては、平常時と同様の教育活動が行えない場合が想定されることから、健康・安全教育や生活指導に重点を置き、弾力的な教育活動を行うよう配慮する。

また、児童・生徒等の心のケアについても十分留意する。

#### 【応急教育計画作成に当たっての主な留意点】

- ・平常時と同様の教育活動が行えない場合であっても、可能な範囲で教育活動の維持・推進を図ること。
- ・登校する児童・生徒等の人数に応じた計画とすること。
- ・地域の実情を踏まえ、学年や発達の段階に応じた計画とすること。

### ①教育の場の確保

校舎等のうち安全が確認された箇所を使用するほか、必要に応じて、他施設（隣接校、その他の公共施設等）の借用や仮教室（仮設校舎）の建設などを検討する。

※事故等の場合は、発生現場等の使用を避けた校舎使用計画を検討する。

なお、ライフライン復旧が見込まれない場合は、仮設トイレ、仮設給水栓・給水蛇口等を確保する。  
また、他施設を借用する場合は、当該施設への通学手段や通学時の安全確保についても併せて検討する。

### ②教育課程等の再編成

被害状況等を踏まえ、必要に応じて以下の対応を行う。

- ・ 授業形態の工夫（始業遅延、短縮授業、2部授業、複式授業等）
- ・ 臨時学級の編制
- ・ 臨時時間割の作成
- ・ 教職員の再配置・確保
- ・ 学校行事（卒業式等）の実施方法の工夫（校庭や学校外施設の活用等）
- ・ 給食への対応（調理不要物資による簡易給食、弁当持参等）

### ③避難所運営との調整

学校施設が避難所として使用されている場合は、教育活動の再開に向け、避難所運営組織と協議し、以下の点について確認・依頼する。

#### 【避難所運営組織との協議事項】

- ・ 立入禁止区域（危険箇所及び学校教育に使用する区域）の確認
- ・ 動線の設定（児童・生徒等や学校関係者と避難者の動線を可能な限り区分）
- ・ 生活ルール（活動時間帯、施設・設備の利用方法等）
- ・
- ・

### ④教育活動再開時期の決定・連絡

次の状況を考慮しつつ、区市町村教育委員会と協議の上、教育活動の再開時期を決定する。

#### 【教育活動再開における考慮事項】

- ・ 学校施設の応急復旧状況
- ・ 危険箇所の立入禁止措置等の安全対策の状況
- ・ ライフライン（上下水道・トイレ、電力、通信回線等）の復旧状況
- ・ 通学路の安全確保状況
- ・ 利用可能な教室数等、教育の場の確保状況
- ・ 登校可能な児童・生徒等の人数、勤務可能な教職員数
- ・ 避難所としての学校利用状況 など

授業再開時期を決定した後は、多様な手段を活用し、保護者及び児童・生徒等へ連絡する。

## 第5 心のケアの充実

阪神・淡路大震災及び東日本大震災の例からも、発災後は、地震への恐怖、家族等の死傷に伴う悲しみ、今後の生活等に対する不安などにより、大人・子供を問わず心が疲弊した状態にあることがわかっている。

このため、児童・生徒等の心の状態に十分配慮し、丁寧な心のケアに努めるとともに、児童・生徒等の対応に当たる教職員についても配慮する必要がある。

学校は、教育委員会や医療機関、相談機関等の関係機関と連携し、スクールカウンセラー、精神科医、臨床心理士等の専門家による、震災後の心のケア対策の充実に努める。

事件・事故災害時におけるストレス症状のある児童・生徒等への対応は、基本的には平常時と同様である。健康観察等により、速やかに児童・生徒等の異変に気づき、問題の性質（早急な対応の必要性、医療の可否等）を見極め、必要に応じて保護者や主治医等と密に連携する。

その上で、学級担任、養護教諭をはじめとする校内組織（教育相談部等）が連携し、組織的に支援に当たることが重要である。

いつでも適切な対応が迅速に行えるよう、平常時から児童生徒等の心のケアに関する体制づくりを行っておく必要がある。

それぞれの役割分担は、以下のとおりとする。

## 1 震災から学校再開まで（安否確認・健康状態の把握と組織体制の確立）

### (1) 管理職

- ア 子供の安否確認、被災状況、心身の健康状態の把握についての指示（家庭訪問・避難所訪問）
- イ 臨時の学校環境衛生検査の実施に関する検討
- ウ 教職員間での情報共有
- エ 教職員の心のケアに向けた校内組織体制づくり
- オ 子供の心のケアに向けた組織体制及び役割分担の確認
- カ 心のケアに関する対応方針の決定と共通理解の形成、全体計画の作成
- キ 地域の関係機関等との協力体制の確立
- ク 保護者との連携・健康観察の強化依頼等
- ケ 緊急支援チームの受け入れ
- ☆ 報道関係機関への対応
- ☆ 障害や慢性疾患のある子供への対応

### (2) 養護教諭

- ア 安否確認及び心身の健康状態の把握
  - ・家庭訪問、避難所訪問
  - ・健康観察の強化
  - ・教職員間での情報共有
  - ・学級担任等との連携
- イ 保健室の状況確認と整備
- ウ 管理職との連携
- エ 学校医、学校薬剤師との連携
- オ 心のケアに関する啓発資料の準備
- ☆ 障害や慢性疾患のある子供への対応

### (3) 学級担任等

- ア 安否の確認及び心身の健康状態の把握
- イ 家庭訪問、避難所訪問
  - ・子供の家庭の被災状況の把握
- ウ 学校再開へ向けた準備
  - ・校内の被害状況、衛生状況の調査
  - ・安全確保
- エ 養護教諭との連携
- ☆ 障害や慢性疾患のある子供への対応

#### (4) 学校医とスクールカウンセラー等

- ア 災害の概要把握及び学校内の対応状況の確認
- イ 子供のメンタルヘルスに関する緊急事態の見立て
- ウ 教職員へのコンサルテーション
- エ 子供及び保護者との個別面談の準備
- オ 養護教諭と協力して、心のケアの資料を準備・作成
- カ 関係機関との連携における調整・つなぎ役

## 2 学校再開から1週間（心身の健康状態の把握と支援活動）

### (1) 管理職

- ア 子供の心身の健康状態の把握と支援活動の指示
  - ・健康観察の強化
  - ・家庭での様子の把握
  - ・臨時の健康診断の実施に関する検討
  - ・教職員間での情報共有
  - ・質問紙調査等の実施
  - ・相談希望調査等の実施
  - ・個別面談の実施
  - ・医療機関等との連携等
- イ 保護者への啓発活動の実施に関する指示
  - ・家庭での健康観察強化の依頼
  - ・啓発資料の配布等
- ウ 朝礼等における心のケアに関する講話の実施
- エ 安全・安心の確保への対応
  - ・被害の拡大、二次的被害の防止
- オ 教職員の心のケアに向けた校内組織体制づくり
- ☆ 障害や慢性疾患のある子供への対応

### (2) 養護教諭

- ア 心身の健康状態の把握
  - ・健康観察の強化
  - ・心のケアに関する質問紙調査、相談希望調査等
  - ・教職員間での情報共有
- イ 保健だより等の啓発資料の配布
- ウ 管理職との連携
- エ 心のケアに関する保健指導の実施
- オ 健康相談の実施
- カ 学校医、スクールカウンセラー、専門機関等との連携
- キ 感染症の予防対策
- ☆ 障害や慢性疾患のある子供への対応

### (3) 学級担任等

- ア 心身の健康状態の把握
  - ・健康観察の強化
  - ・心のケアに関する質問紙調査、相談希望調査等
- イ 教職員間での情報共有
- ウ 保護者との連携
  - ・啓発資料の配布
  - ・家庭での健康観察強化の依頼
  - ・個別指導
- エ 養護教諭との連携

☆ 障害や慢性疾患のある子供への対応

(4) 学校医とスクールカウンセラー等

① 子供や保護者に対して

- ア 子供や保護者の個別面談
- イ 必要に応じて地域の専門機関への紹介

② 教職員に対して

- ア 子供への対応に関する助言及びストレス対応研修
- イ 校内関係委員会への参加による共通理解の形成
- ウ 教職員間での情報の共有
- エ 個別支援

3 心身の健康状態の把握

校長は、事故・災害等の発生後、被災した児童・生徒等及び事故・災害等の目撃するなどにより、心身の健康に影響を受ける可能性がある児童・生徒等（以下、「当該児童・生徒等」とする。）について、各教職員に次の役割分担に基づく対応を指示し、その心身の健康状態を把握する。

(1) 学級担任

- ・「危機発生時の健康観察様式」を用いて、当該児童・生徒等の健康状態を把握する。
- ・必要に応じて保護者と連絡をとり、当該児童・生徒等の状況等について情報収集を行う。
- ・これらの結果は、養護教諭へ共有する。

(2) 保護者からの情報収集

- ・学級担任は、保護者に「身体状況等調査票」を配布し、記入の上、提出を求める。
- ・学級担任は、内容を確認の上、「危機発生時の健康観察様式」とともに養護教諭へ提出する。

(3) 養護教諭

- ・学級担任から得た情報及び保健室を訪れる児童の状況等を基に、全体的な傾向及び個別の児童・生徒等の状況を把握・整理し、管理職に報告する。

(4) 養護教諭

- ・当該児童・生徒等について注意深く観察し、気付いた事項を学級担任及び養護教諭に共有する。

4 ト라우マ反応への対応

事故・災害等によりトラウマを経験した児童・生徒等には、情緒面、行動面、身体面、認知面などにおいて、下表に示すような様々な反応が現れることがある。

情緒面	・恐怖・怒り・抑うつ ・フラッシュバック	・分離不安・退行（いわゆる「赤ちゃん返り」） ・感情の麻ひ	・睡眠障害 等
行動面	・落ち着きのなさ ・衝動的な行動（暴力的行為・自傷行為等）	・いらだち	・集中力の低下 ・非行・薬物乱用 等
身体面	・吐き気・嘔吐 ・かゆみ等の皮膚症状 等	・頭痛・腹痛などの身体的な痛みの訴え	
認知面	・安全感や他者への信頼感の喪失 ・自尊感情の低下	・罪悪感	・対人関係上の様々なトラブル 等

危機発生直後、強いストレスにさらされた児童・生徒等にトラウマ反応が見られる場合には、次に示す点に留意して対応する。

- 穏やかに子供のそばに寄り添う。
- 「大変な出来事の後には、このような状態になることがあるけれど自然なことだよ」などと伝える。
- ・不安に対して
  - 子供の話（怖い体験や心配や疑問も含む）に耳を傾け、質問や不安には子供が理解できる言葉で、現在の状況を説明する。
  - ただし、子供の気持ちを根掘り葉掘りきいたり、あまりにも詳細に説明しすぎたりするのは逆効果である。
- ・体の反応に対して
  - 体の病気はないのに、不安や恐怖を思い出して体の症状（気持ち悪い、おう吐、頭が痛い、おなかが痛い、息苦しいなど）を訴える場合もある。
  - 体が楽になるように、さすったり、暖めたり、汗をふいたり、リラクセーションを促し、その症状が楽になるようにしてあげる。
- ・叱らないこと
  - 不安状態であるときに、子供はふだんできていたことができなくなったり、間違ってしまったたりする。それに対して叱られると、不安が増してしまう。
  - このような状態の時は、子供が失敗しても「けがはなかった？」「大丈夫だよ」などねぎらいの言葉をかけて、心配していることを伝えれば良い。

※出典：文部科学省「学校における子供の心のケアサインを見逃さないためにー」（平成26年3月）

## 5 心のケア体制の構築

校長は前記3に基づき、必要と認める場合には、以下のとおり「心のケア委員会」を設置し、当該児童・生徒等に対する心のケア体制を確立する。

### [心のケア委員会]

構成員	<ul style="list-style-type: none"> <li>・校長                      ・副校長                      ・教務主任                      ・生徒指導主任</li> <li>・保健主事                      ・養護教諭                      ・当該児童等の学級担任</li> <li>【必要に応じ、以下の者へも参加を要請する】</li> <li>・スクールカウンセラー                      ・スクールソーシャルワーカー</li> <li>・学校医</li> </ul>
協議・検討事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・当該児童・生徒等の心身の健康状態に関する情報の把握及び共有</li> <li>・対応方針の決定（全校対応、学級対応、保健室対応等の対応規模、地域の専門機関等による支援の要否 等）</li> <li>・ケア及び指導の方法（個別ケア、集団指導等）</li> <li>・保護者等からの相談窓口設置の要否</li> <li>・教職員間の役割分担の整理（ケア・指導の主担当者等）</li> <li>・専門機関等の支援者の役割分担及び支援内容の整理</li> <li>・教職員への情報提供、教職員向け研修等の実施要否</li> </ul>

## 6 関係機関等との連携

校長は、当該児童・生徒等の心のケアを行うに当たり、必要に応じて、地域の専門機関等（関係機関・団体、心のケアに関する医療機関等）との連携を図る。

なお、医療機関等の地域の専門機関等を紹介する場合には、当該児童・生徒等及びその保護者に対し、

当該期間の役割や相談等の必要性について丁寧に説明し、了解を得るものとする。

## 7 教職員の心のケア

### (1) 管理職の対応

校長は、事故・災害等の発生後、自身又は家族が被災した教職員及び事故・災害等への対応に当たる教職員について、過度のストレス状況を避けるなど、心の健康に配慮する観点から、例えば以下の対応を検討する。

- ・被災した教職員に対し、勤務内容や業務量等について現実的な配慮を行う。
- ・学校が避難所になった場合は、速やかに管理を行政に委ねる。
- ・報道対応の窓口を一本化し、教職員の負担を軽減する。
- ・不要不急の業務を見極め、教職員の業務分担の見直し、応援職員の要請、臨時の人員配置等を検討する。
- ・事故・災害等への対応は、個人に負担を集中させず、チームで対応する体制を整える。
- ・教職員の心の健康に関する研修会を実施する。
- ・状況に応じて、心の健康に関するチェックを行う。
- ・休暇取得が本人の不利にならないように配慮する。

また、一日の活動の終わりに、教職員間（必要に応じてスクールカウンセラー等を交えて）で、その日の活動を振り返る時間を設け、自由に安心して話せる環境の下で、子供に関する情報共有や自身の体験、それに伴う感情を語り合う機会を確保する。

### (2) 教職員の対応

教職員は、事故・災害等の発生後に児童・生徒等への適切な支援を行うためには、自身の健康管理が重要であることを理解し、以下の点を心がける。

- ・個人ができることには限界があることを認識し、一人で抱え込まない。
- ・ストレスに伴う心身の不調は誰にでも起こり得ることを理解し、相談や受診をためらわない。
- ・リラクゼーションや気分転換を意識的に取り入れる。

さらに、自ら及び同僚の心身の状態を注意深く観察し、不調をできるだけ早期に発見して、休息や相談につなげるよう努める。

## 第6 転出入に伴う学籍変更等

避難先が遠距離となり通学が困難な場合には、本人及び保護者の意向を十分に聞き取った上で、必要に応じて転退学の手続をとる

一方、学校に通学可能な範囲の避難所に避難している児童・生徒等については、原則として元の学校に籍を置くものとする。

なお、学校はこれらの取扱いについてあらかじめ保護者に十分周知するとともに、転出入に伴う手続について、避難所等への掲示などにより、保護者への周知徹底を図る。

## 第7 入学（就学）相談に関する対応

入学（就学）を控えた児童・生徒等の保護者にとって、震災後の混乱した状況下での入学（就学）は大きな不安要因となる。

このため、学校は、入学（就学）前の相談が円滑に行えるよう、相談コーナー（相談窓口）を設置し、保護者及び児童・生徒等の不安の解消に努める。

入学者選抜の日程変更等を検討する場合には、受検者間に不公平が生じないよう、統一的な対応を図る観点から、公私連絡協議会（教育庁、生活文化局私学部、一般財団法人東京私立中学高等学校協会）を構成して検討・協議を行う。

都立高等学校の受検者の被災状況等により、必要に応じて、入学者選拔出願書類の提出期限の変更、入学考査料の納入猶予、入学者選抜試験の日程変更、試験会場の変更等の措置を講じる。

実施した措置については、学校や報道機関等を通じて、受検者に周知する。

## 第8 授業料の免除等

東京都地域防災計画においては、区市町村が、被災した児童・生徒に対する学校納付金等の減額・免除について、必要な計画を策定することとされている。

教育委員会では、災害救助法が適用された場合、東京都立学校の授業料等徴収条例に基づき、都立学校の入学考査料、入学料及び授業料について、減額、免除又は納付期限の延長の措置を行う。

この場合、全ての都立学校及び教育委員会において、被災者に対し、これらの減免制度について十分に周知するとともに、報道機関への資料提供等により、制度の広報を行う。

なお、授業料については、国の「高等学校等就学支援金」制度や、都の減免制度の適用を受ける者は徴収対象とならない。

これらに該当せず、授業料の徴収対象になる場合であっても、被災により授業料の納付が困難と認められる者については、減額、免除又は納付期限の延長の措置を行う。

また、教科書等の学用品を必要とする被災した児童・生徒については、高校の教科書の給与は災害援助法の適用対象外であるが、必要とする生徒数が多い場合には、国に支援を要請する。